

平成22年 6月 15日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007～2009年度
 課題番号：19530769
 研究課題名（和文） 異文化間教育研究におけるインタビュー手法の相互性構築過程と作品化の研究
 研究課題名（英文） A study of construction process of reciprocity in interviews in the field of intercultural education
 研究代表者
 中島 智子（NAKAJIMA TOMOKO）
 プール学院大学・国際文化学部・教授
 研究者番号：80227793

研究成果の概要（和文）：異文化間教育研究において、我々はともすれば調査対象者にあらかじめ「異」を設定し、調査プロセスはその「異」を確認、回収するプロセスだと見なしがちである。しかし、インタビューという手法においては、インタビュアとインタビュイの間に相互性が構築されていくプロセスが確認できた。その結果、あらかじめ想定した「異」が変容したり、全く異なる容貌をみせることがあり、再解釈を迫られたり、調査の前提を再考する必要に迫られることもある。こうしたインタビュープロセスは、アクティブ・インタビューとも言われ、異文化間教育研究に新たな視点を導入するものである。

研究成果の概要（英文）：In the field of intercultural education research, it is often assumed that a role of researchers is to identify *differences* in research subjects and that investigation consists of recognition and collection of such differences. However, in a study of construction processes during interviews, it can be observed that reciprocity is established between interviewer and interviewee by the construction of mutuality. Through this construction an assumed difference may be modified and/or may be totally separated as a single feature. Researchers may, therefore, need to reinterpret or reconsider the premise on which the research is based. Such an occurrence during an interview is named *the active interview*, and introduces a new aspect to the field of intercultural education research.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：異文化間教育

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：異文化間教育研究・インタビュー・相互性・作品化・調査倫理

1. 研究開始当初の背景

本研究には、これに先立つ2つの共同研究からの流れがある。平成13年度から15年度までおこなった「1970年代以降の在日韓国・朝鮮人教育研究と実践の体系的研究」(研究代表者中島智子、課題番号13610328)において、在日朝鮮人教育が在日朝鮮人生徒だけでなく日本人生徒にも意義のある教育と言われながら、実際には実践記録に日本人生徒がほとんど登場しないことが明らかになり、そこから次の「多文化教育における『日本人性』の実証的研究」(平成16~18年、研究代表者野入直美、課題番号16530333)へと展開した。在日朝鮮人教育も日本における多文化教育の一つの実践形態であると考えた場合、そこにおいて日本人生徒はどのような学びを経験しているのか、そこから「日本人性」研究のアプローチを探ろうというのが目的であった。

後者の研究において、「日本人性」の解明のためと実施した高校の卒業生に対するインタビュー調査において、当初は朝鮮文化研究会活動に携わった日本人だけを取り出してインタビューを開始したところ、その方法の間違いにすぐに気づかされた。日本人(元)生徒だけにインタビューをしてその経験を聞き出そうとしたが、当然のことながら、日本人(元)生徒は在日朝鮮人生徒やその他のさまざまな人たちとの関係性の中で学んでいた。早い話が、語られた一つのエピソードにおいてすら、何人もの生徒たちや先生、その他の人びとが登場し、重要なキーパーソンになっていた。インタビュー対象者の経験を解釈しようとするだけでも、その場を共有した人びとの経験と合わせなければ、エピソード一つの理解もおぼつかないことが判明したのである。われわれが無意識のうちに、「日本人」とそれ以外を分けるという「異」の機械的線引きをしていたことが、反省された。

こうして、インタビュー調査は芽づる式に関係した(元)生徒たちへと広がり、学年を越え、もちろん国籍やエスニシティは多様にわたることになった。この調査結果の一部を学会で発表したところ(中島智子・野入直美「高校の朝文研活動にみる日本人/外国人生

徒の関係性と学び」異文化間教育学会第27回大会、2006年6月3日、関西大学高槻キャンパス)、調査プロセスを開示したインタビュー調査のメタ的な報告部分に、関心を寄せる参加者たちがいた。そこで、インタビュー調査という方法に焦点づけた共同研究を行おうと、その人たちに声をかけて出発したが、本研究であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、異文化間教育研究において、「異」が立ち上がり、被調査者との相互行為を経て揺れ動いていく、動的なく「異」の成り立ちのプロセスとして、インタビュー調査を分析の俎上に載せることである。調査者を透明な位置に立たせず、インタビューの相互性構築過程をあきらかにするような作品化を試みた。また、調査倫理の問題についても明らかにし、解決法を提案するものである。

3. 研究の方法

初年度は、まずインタビュー手法の相互性と作品化プロセスに関する理論的実践的課題を先行研究から学ぶために、この分野の第一人者である桜井厚氏をゲスト講師に招いて勉強会を行った。それを踏まえて、メンバーは各自、すでに行ったインタビューデータの読み直しをしたり、再インタビューを行い、インタビュー手法に自覚的な分析方法や作品化のプロセスについて検討した。アクティブ・インタビューを新に始めたメンバーもいた。その際、各自が自分のデータを分析した結果だけを報告しあうのではなく、研究会でデータを共有し、共同で読み取り検討する手法をとった。

その結果、調査データの分析や作品化プロセスを共同化することによって、気づかなかった読み取りや分析視点を得ることができた。また、それをもとに再インタビューすることの有益性が確認された場合もあった。特に、調査者と被調査者との関係は、インタビューのやりとりを第三者が読み込むと調査者自身の認識とは異なる指摘がなされ、それを受けて調査者が再読み込みをしたり再イ

インタビューすることで、それまで見えなかった意味を読み取れるようになることがある。このプロセスを経ることによって調査対象者との関係が変化し、より深いインタビューが可能になったケースがあった。

また、調査フィールドとの関係でトラブルに巻き込まれたケースや、調査フィールドでの人間関係で悩むというケースが生じ、フィールドとの関係や研究者の倫理について実践的な研究を行うことができた。

なお、調査データをどのように切り取り提示するかという点については、鯨岡駿(2005)『エピソード記述入門－実践と質的研究のために－』(東京大学出版会)を参考に、エピソード記述法の有効性についても検証した。

4. 研究成果

研究成果としては、それぞれの作品化を通して次のような結果を得、それを報告書にまとめた。

倉石は、『『接触』からアクティブな他者との『出会い』へ：異文化間教育研究におけるインタビュー認識の転回』と題して、本研究の理論的な位置づけをおこなった。異文化間教育研究の中で行った「日本人性」研究を例に、自然科学パラダイムから人文科学パラダイムへの転回の出発点にインタビューが位置づくことが明らかにされた。

野入論文「継続し変容する「多文化共生」の学びの意味：全国在日外国人生徒交流会OB追跡調査」は、最初の調査から数年経た後でおこなわれた追跡調査をもとに作品化し、「語りにおける過渡期性」について論じた。そこでは、「異」を生きる、「異」と格闘しながら、「異」を戦略的に使っても行く、まなざされる「異」を批判的に読み取りながら、自分との葛藤や取り込みを通して学んでいく姿が、追跡調査によってよりダイナミックにあらわされた。

渋谷論文「データ分析から作品化へ：モデル・ストーリーをめぐって」は、海外で育つ国際結婚家庭の子どもの日本語学習についてのモデルストーリーをとりあげ、その功罪を分析した。モデルストーリーは、「異」を固定化してしまう面も持つが、その前にどのようなモデルストーリーが誰に必要とされるのかの認識は欠かせないこと、また、モデルストーリーは、それを必要とするコミュニティの中で創られると同時に、研究者もその創造と伝達に大きな役割を果たすことに注目し、その過程を再帰的に分析した。

中谷論文「多言語インタビューの分析に関

する考察：グラウンデッド・セオリー・アプローチでの限界」は、多言語インタビューという方法上の特徴とインタビュー内容の分析との関係を扱った。インタビューとインタビューの母語が異なる場合、インタビューで使用される言語が複数にわたることはしばしばあるが、言語使用の影響を無視して語られた内容だけを読み取っていいものかという問題意識を背景に、すでに作品化したインタビューを再読み込みをした。その結果、インタビューの場面と使用言語(の変化)、語られた内容が互に関係しているかが明らかにされ、インタビューもアクティブな位置取りをしていることがわかった。

中島論文「在日朝鮮人教育研究とインタビュー法」は、同じ世代、同様な経歴に見える二人の教師が、同時期に赴任した在日朝鮮人多数国籍校で受けた第一印象やインタビューでの語り方の違いに注目して、ライフストーリーを含めたインタビュー調査によって在日朝鮮人教育研究がより豊かになることをあきらかにした。これまで在日朝鮮人教育は、教師による実践記録や実践経験を本にまとめたものなどが主要な情報源となってきた。その成果は大きい、一方でそれだけでは読み手が単に情報の受け手となり、在日朝鮮人教育の世界というある種「異」を固定した印象を受け取ってしまうこともある。インタビューという手法も合わせることの意義が提案された。

矢野論文「ライフストーリー・インタビュー作品化の協働は可能か：在日朝鮮人教育に向かう『バネ』の解明」は、同じく在日朝鮮人教育にかかわってきた教師のインタビューであるが、先のがすでに行っていたインタビューデータの再読み込みを作品化したものであるのに対して、こちらはこの共同研究のスタートを契機におこなわれたものである。もともとぜひインタビューしたいという思いを持っていた相手に対して、依頼をかけ、何度にもわたるインタビューをおこない、その間の両者の経緯もまじえて、作品化を協働しておこなっている。まさに「アクティブ」なプロセスそのものが活かされた。

藤田論文「音声・映像機器による記録の倫理」は、インタビュー調査に欠かせない音声・映像機器の持ち込みやその利用について、調査倫理の問題ともからめて論じた。調査倫理の問題は、海外では具体的な方策も採られているが、日本においてはまだ一般論として認識されているか、研究者の自覚レベルにどうまっているきらいがある。藤田論文では、先行研究を整理して提供するとともに、自身

が経験した調査現場でのトラブルを事例的に検証した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ①渋谷真樹、国際結婚家庭の日本語継承を支える語り—スイスの日本語学校における長期学習者と母親への聞き取り調査から、母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究、査読有、6 号、2010 (刊行予定)
- ②徳井厚子、地域での外国につながる子どもの支援の場の再構築過程—国際室・教育委員会・大学生の関係と当事者の捉え方の変容を中心に—、信州大学教育学部研究論集、査読無、第 3 号、2010 (刊行予定)
- ③矢野泉、自己教育と異文化接触—台湾古老の昔語りに関する考察を通して—、横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学)、査読無、NO. 11、2010、pp. 181~188
- ④倉石一郎、教育研究におけるインタビュー・データとの「つきあい方」とメタ理論—「無知の知」と「先回り型の知」のはざままで、教育社会学研究、査読有、84 集、2009、pp. 27~48
- ⑤矢野泉、ライフストーリー・インタビューのプロセスそのものを物語として読めないか—在日朝鮮人教育に取り組む元小学校教員 S との協働の試みから—、社会臨床雑誌、査読有、第 16 卷 3 号、2009、pp. 58~65、
- ⑥矢野泉、元小学校教師のライフストーリー・インタビューにおける同僚関係追求に関する研究、横浜国立大学教育人間科学部紀要 I (教育科学)、査読無、No. 11、2009、pp. 141~147
- ⑦矢野泉、(実践ノート) 脱人間中心主義の教育思想を視野に置くハイブリッドな生命圏における育ち直し~カミングアウトの語りから~、社会臨床雑誌、査読有、第 16 卷 3 号、2009、pp. 102~104、

⑧倉石一郎、地方教育史研究におけるインタビューの可能性—紙の世界の向こうを張ろうとをきく—、フォーラム現代社会学、査読無、第 5 号、2008、pp. 72~83

⑨藤田美佳、日本人男性と国際結婚した海外出身女性の日本語学習—子どもの成長を支える親としての学び—、解放教育、査読無、490 号、2008、p. 33~43、

⑩倉石一郎、<社会>と教壇のはざまに立つ教員—高知県の『福祉教員』と戦後の同和教育—、教育学研究、査読有、74 卷 3 号、2007 年、pp. 40~49

[学会発表] (計 5 件)

- ①渋谷真樹、継承語教育を支える語り—スイスの日本語学校での聞き取り調査から—、母語・継承語・バイリンガル教育研究会、桜美林大学、2008 年 8 月 10 日
- ②藤田美佳、地域日本語教室における生涯学習としての日本語—60 代で日本語能力試験に合格した日本人男性の配偶者である韓国出身女性の事例を基にして、日本語教育世界大会、釜山外国語大学、2008 年 7 月 12 日
- ③徳井厚子、関係性の構築・再構築のダイナミズム—地域における外国につながる子どもの支援の事後インタビューから、異文化間教育学会、京都外国語大学、2008 年 6 月 1 日
- ④中島智子・野入直美・渋谷真樹・藤田美佳、異文化間教育研究におけるインタビュー手法の相互性構築過程と作品化の研究、異文化間教育学会、京都外国語大学、2008 年 6 月 1 日
- ⑤矢野泉、インタビューにおける異の生成—調査現場のわれわれにおける関係性、権力性、作品化—、異文化間教育学会、京都外国語大学、2008 年 6 月 1 日

[図書] (計 2 件)

①倉石一郎、包摂と排除の教育学：戦後日本社会とマイノリティへの視座、生活書院、2009、

②倉石一郎、他、排除と差別の社会学、有斐閣、2009、304

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島 智子 (NAKAJIMA TOMOKO)
プール学院大学・国際文化学部・教授
研究者番号：80227793

(2) 研究分担者

倉石 一郎 (KURAIISHI ICHIRO)
東京外国語大学大学院・総合国際学研
科・准教授
研究者番号：10345316

渋谷 真樹 (SHIBUYA MAKI)
奈良教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：80324953

徳井 厚子 (TOKUI ATSUKO)
信州大学・教育学部・准教授
研究者番号：40225751

野入 直美 (NOIRI NAOMI)
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号：90264465

藤田 美佳 (FUJITA MIKA)
神奈川大学・人間科学部・講師
研究者番号：90449364

矢野 泉 (YANO IZUMI)
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：00276867

